## 1

その男は、真夏の強い陽差しを照り返すアスファルトの路上に立っていた。緑の濃い銀杏の街路樹を背に、一人枯れ木のように見えた。

　千賀子が歩み寄っていくあいだ、男は笑顔を浮かべるのでもなく、会釈をするのでもなく、喉元に手をやってネクタイの結び目をゆるめるのでもなく、ただじっとして、近づいてくる彼女を見つめていた。故郷を懐かしんでいる動物園の象のような、小さい哀しげな目だった。

　確か、一度どこかで会った覚えのある顔だ――と思った。そして、声の届く距離にまで近づいたときに、思い出した。

　もう半年は前のことになる。あの事件のすぐあと、マンションの出入口のところで会ったのだ。千賀子は出かけるところで、正面玄関のオートロックのドアを内側から開けようとしていたのだが、ドアの向こう側に人がいるのを見つけて、足をとめた。

　あの男は、三十歳そこそこぐらいの若い男と二人連れで、インタホンのそばに立っていた。マイクに向かって話しかけていた。





「森永さんですね？　丸ノ内中央署の滝口と神田です」

　森永夫妻のどちらかが、男の声に答えたのだろう。すぐに、電気錠ががちりという音をたてて解除される。千賀子は重いドアを押し、二人の刑事を先に通した。

「失礼」と、あの時あの男は言った。「お嬢さんもこちらにお住まいですか？」

「はい」と、あの時千賀子は答えた。「すぐ開けてさしあげなくて、ごめんなさい」

　男はかすかに笑みを見せて、こう言った。「いや、あれでいいんですよ。我々がよからぬ考えを持った侵入者でないとは限りません。誰かドアを開けてくれそうな人が出てくるのを待って、インタホンに話しかけるふりをしていただけかもしれない。ここの入居者に用があって、先方の許可を受けて中に入る人間だ――とわからないうちは、親切心など出すことはありません。そうでないと、オートロックの意味がありませんからね」

「どんな良い設備も、使い方次第では役に立たないってことですね」

「そのとおりです」

　そう言い残して、二人の刑事はエレベーター・ホールへと歩いて行った。千賀子は外に出た。振り向いちゃ駄目と、心に言い聞かせながら。

　あの時のことを、千賀子はよく覚えていた。鮮やかに再生することができた。一部始終、なぜならそれは、千賀子が手を貸して実行したあの事件のあと、じかに警察官と接触した、たった一度きりの機会だったから。

今また、あの時の男が目の前に立っている。そして今度は、千賀子に会いにやってきたのだ。

「羽田千賀子さんですね？」

男は静かに問いかけた。千賀子はうなずいた。

「電話でも申し上げましたが、私は丸ノ内中央署の滝口と申します。少しお伺いしたいことがありまして」

この暑いのに、男は濃い茶色のスーツを着込んでいた。その上着の内ポケットから黒い手帳を出すと、ちらりと見せる。千賀子はもう一度うなずいた。

「せっかくの昼休みにお呼びたてして申し訳ありませんな。食事はどうなさいます」

「かまいません。あまり食べたくないので」

胸の奥で、心臓が、出口を探す臆病な動物のように騒いでいる。それに刑事さん、食事しながら話せるような用件でいらしたんじゃないでしょう？　という言葉が、喉まで出かかった。

決めつけるのは、まだ早い。うろたえてはいけない。そう思った。

「じゃあ、どこか喫茶店にでも入りますか」

千賀子はちょっと考えてから、首を横に振った。この時間、近くの喫茶店はどこでも、同僚たちであふれている。妙な好奇心を興されるのは嫌だった。



返事はいらない

まして、逮捕されるところなど見られたくない。その思いが頭をかすめて、背中がスッと冷えた。

「この先にベンチがあるんです。木陰だから涼しいし……」

自分でも情けないほど、かすれた声しか出なかった。千賀子は自分を励まして、さり気ない風を装った。

「でも、刑事さんはクーラーのある場所のほうがよろしいでしょうか」

滝口は、千賀子の言葉の意味するところを察して、にこやかに答えた。

「私なら、外で結構ですよ。このくたびれたスーツなら、気になさらんでください」

「暑くないんですか」

辺りにちらほらと見えるこの会社の男性社員たちは、みんなワイシャツ一枚で、しかも袖まくりをしている。女性社員たちも、外へ出るときは制服のベストを脱いで、かろやかな半袖ブラウス姿で歩いている。気温は今日も三十度を楽に超えていた。

「あなたも私ぐらいの年齢になれば、年寄りは夏でもそんなに汗をかいたりしなくなる、ということがわかりますよ」

楽しそうに言う滝口の言葉に、不本意ながら、千賀子は微笑をもらした。

「じゃ、冷たいものでも買ってきます。会社の自動販売機ですから、大したものはありませんけど。何がいいでしょうか」

「炭酸の入っていないものを願えますか」滝口は言って、胃の辺りを指差した。「こいつが弱っているもので」

くるりと回れ右をして、社屋のほうへ戻ろうとする千賀子を、滝口はじっと見つめている――その視線を、くっきりと感じることができた。五、六歩離れたとき、彼に呼びかけられた。

「やはり、私が行きましょうか。そのほうがよさそうだ」

千賀子は足を止めたまま、つっ立っていた。やがて振り向いた。滝口はそれを待っていたような顔をしていた。

「あなたのことは、森永さんご夫妻から聞いてきました」

どこまでも落ち着いた声音で、彼は言った。一瞬、千賀子の頭のなかから、周囲の景色が消えた。

「そうですか……刑事さん、わたし、逃げませんから」

言ってしまってから、その言葉を呼び戻そうと、千賀子ははっと息を呑んだ。

滝口はゆっくりと答えた。「わかっています」

その目は、依然として放心した象のような色をしている。

「あなたは逃げる人じゃない。たいへん立派だった」

千賀子は走って社屋に駆け込んだ。オレンジジュースを二本買って、また駆けて戻った。





この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。